

# 日米の新築戸建住宅の空間構成

尚絢女学院短大 桂 重樹

**目的** 日本の住宅規模は持ち家に限ってみれば拡大を続け92年には平均延面積が137.5m<sup>2</sup>と平均値で見ると、米国の次いで規模の大きい住宅をもつ国になった。間取りを見ても和室中心からプライバシーを配慮した洋室中心の間取りへと変化してきている。このように変化する過程において、いろいろな形で米国の住宅が参考にされてきた。そこで、日本の住宅に影響を与えている米国の住宅を床面積を中心に詳細に調べ、日本の住宅との類似点、相違点について検討した。

**方法** 分析対象は建売住宅とし、日本の住宅として大手ハウスメーカーが建売住宅として販売している住宅を取り上げた。また、米国の住宅については住宅建築予定者向けの図面集に掲載している設計事務所より、詳細な図面を購入した。このような方法で収集した日本の住宅32戸と米国の住宅12戸を対象として、公室、私室をはじめとして、浴室などの水回り、押し入れ、物入れ、クローゼットなどの収納、玄関、廊下などの通路など、各空間に分けて日米の住宅で延面積に対する比率を求め比較した。

**結果** 日米の住宅とも公室と私室を分離して設けている点は類似しているが、米国の住宅においては夫婦の寝室が広さの点においても専用の浴室を持つなど、設備的にも最も重視して造られている。各空間の延面積に対する比率は、日本の住宅では私室、公室および水回りの比率が低く、ホールと収納空間の比率が相対的に高かった。また、日本の住宅には必ず1階に和室が設けられているが、この部分の床面積の扱いによっては、米国の住宅と各空間の構成比率が類似してくることなどを示した。